

野兎の眼

野兎の眼

串田孫一

Leporis
vitam
vivit

青娥書房

野兎の眼

検印廃止

昭和四十七年四月二十日 第一刷発行

著者 串田孫一

発行者 加清 蘭

発行所 株式会社青娥書房／東京都千代田区三崎町三一―一四

郵便番号 一〇一

電話東京（二六一）八一二三／振替東京二一四〇〇

印刷所 株式会社東徳

製本所 土開製本株式会社

定価 七八〇円

落丁本・乱丁本はおとりかえいたしません。

目次

ある小さな岩峰	10
甦る山麓	14
斜光に輝く山	17
山上の池	20
尾根路	23
夢を見た山	26
黄金に光る峰	29
溪谷	32
私の山みち	35
冬枯の谷にて	39
ある男	42
山の子供たち	44
雪崩	6

闇との向いあい	48	四十一年目に登った山	55	別格の山	59	笹子峠	62	旅する心	70	旅仕度	73	ひとりの旅	75	僻地	78	窓際の座席	83	いかづちの丘	88	炎天の旅	92	荒れた海	94
甲板にて	98	泛子	101	蛸の鳴く麓	104	牧場	108	番小屋	111	冬の旅の一日	113	野兎の眼	118	枯葉の下が目覚め	122	春を告げる虫	125	発芽・再生	127	空の光	129	都会の季節感	133

Les lièvres qui
sont dans les
pays de collines
élevées, ou
dans les plaines
en montagnes
sont excellents
au goût; ceux
qui sont vers les
marais... mauvais

雪崩

古い小屋にひとりで滞在していた。二日目には山へ登った。行けるところまで行って、引き返すことにしていたが、知らずしらず昔の気持ちになったのか、もう少し、もう少しと登って山頂まで辿りついた。途中で引き返すことが、もうそれほど口惜しいとは思わなかった。天候もよく、体調もよく、引き返す理由が何もなかった。

山頂に立ったことは、私を落ちつかせて、この滞在が予想して来た以上に明るいものになった。若いころにくらべると当然体力は衰えているので、そうなるかと、かつてはそれほど苦勞せずに登った山も、大きくまた険しくなるのは当然で、既にそういう経験も何度かしてはいるが、時によると、ほとんど昔同様に、なんとなく、すらすらと登れてしまうこともある。

するとまた、それならばという気持ちもわいて来て煩悶がはじまるが、その辺は自分を適当になだめることにして、頂上まで行って来た翌日は、前日にも増してすばらしい天気

ではあったが、終日、小屋の付近でぶらぶらしていることにした。

私はパンと水筒とを袋に入れて背負い、画帳をかかえて、登った山をもう一度よく見るために、対斜面を三十分ばかり登った。

小屋の周囲の雪も、前日登った次の雪もよくしまっていて歩きよかったのに、陽のあたりぐあいのせいかな、この対斜面の雪はぐずぐずに腐っていて、足を深く踏み込み、木々の下枝がはね、始末が悪かった。画帳も袋に入れて両手を使ってなるべくぐらない算段をし、ひと汗かいて眺望のいいところまで登った。

まず雪を念入りに踏みかため、枯枝をたっぷりと敷いて憩いの場所をつくった。

どこをさがしても人影の見当たるはずもない、明るく静かな山の春であった。正午にそろそろ近い太陽が、遠く小さくはあったがその光は強かった。地上の生物はその強い光と交渉を深めながら、生命の営みの調子を次第に高めていた。このあたりでは、木々の枝先の芽はどれもまだ堅くはあったが、そういう小さい芽も、光にこたえて、生命をふるわせるような音を立てているように私の耳には聞こえた。

確かに耳をすましていると、私の周囲では実にさまざまの音がしていた。その音の中で長いあいだ雪におさえられていた枝のはねる音や、雪の塊が崩れる音や、ずっと上の斜面を気まぐれに吹き渡る風の音などは、もちろん聞き分けられるが、見当のつけようもない

小さい音は、まだいろいろ聞こえていた。

私はつい十年ほど前までは、雪の消えて行く山の春を寂しい季節だと思っていた。それは自然の春の賑わいに逆らう意味ではなく、雪の激しく降り、風の荒れ吹く厳しい季節の山を第一に考えていたためだった。

厳冬の、吹雪の山をいつも歩き足りないように思っていたので、春の訪れが時には寂しく、時にはいまいまいしく感じられ、山の中で、雪がもう一度冬を呼び戻してくれるのを願っている時に、急に気温が上昇して雨が降り出したりすると、空へ向かって何かを投げつけたくなるほどに、狂ったような気分であった。

だが今は、そんな威勢のいいことは考えない。やっと素直に自然に順応できるようになったのかもしれない。それが果たしていいことかどうか、また衰えなのかどうなのか、それは分からない。けれども何かを主張し、強く激しく願望する自分が消えると、それはそれで、また目にはいつて来るものも異なってくる。目に入らなかったものも見えて来る。聞こえて来る自然の新しい叫びがある。

それは自然の仕組みの複雑で、かつ巧妙さを物語っているのかも知れないが、同じ川音にしても、私に語りかける内容が変わって来るのは、幾らかは私の方の、新しい角度からの積極性によるものかも知れない。

暖かい日ざしに誘われて鳴き出した小鳥の声をききながら、そのさえずりに合の手を入れてやろうと、口笛を鳴らそうとしていると、ほとんど雲もない空から雷鳴のようなどどろきが、大地をふるわせながら伝わって来た。

だがそれはすぐに雪崩の音と分かり、立ち上がってみると、前の日に私が登った沢の一つ左手の沢を雪の大きな塊が落ちていたのだった。

しかし小鳥はそのためになえずりをやめはしなかった。

ある小さな岩峰

その岩峰は、長い滞在のあいだに私が見つけた静かな場所であった。岩が積み重なっているその頂上は、登ってみてはじめて分ったが、何時間でもねそべっていられる大きな、凹凸の少ない岩があり、またその岩の一段下には体をちょうど入れられる凹みがあって、不完全ながら雨や風をよけることも出来た。

縦走路から遠く離れ、たまに訪れる者のあるような岩稜からはずれていた。知ってるのは高山の夏の空を飛びまわっている小鳥ばかりなのが私には大層嬉しかった。

昔、私の思慮分別は大ざっぱであったかも知れないが、その代りに勇気があった。分別も思えば今よりはかえって細かに働いていたかも知れない。何故なら、その頃はしたいことを仕遂げるのに、道をひらいて行くのも巧みだったし、速やかだった。そしてそのすべてが、今から思い返しても見当違いではなかった。

夏の山の合宿が終った。合宿は、ほとんど雨であったが、雨の中で予定したことは全部

終らせた。合宿に参加した、まだ山をよく知らない年下の人たちに、意地の悪い山の教え方はしなかった。雨の中での炊事だとか、四方の眺望の全くない霧と風との登山を、愉快にするために、合宿の指導を引き受けている私たち三人の仲間は、三つの天幕に分かれて生活し、連絡をとりながら公平に仕事を分け、他人によりかかっていることのないようにした。

その合宿が終ってから、私たち三人の、気がねも何も要らない山の生活がはじまった。それが私たちの穂高であった。何日までに山を下らなければならないという窮屈な考えもなく、今日が何日であるかも不確かになるくらい、山の中へと移り切った。そして自分自分の家が遙か遠くにあつて、そこに家族が帰りを待っているのも、実感の伴わない別の世界のことのようにだった。

しかし不思議なことに、氣心をよく知り合つた仲間だけの生活も、一週間、十日と日数が重なつて来るとお互いに我儘になりすぎたせいもあるけれど、何とはなしに氣詰りになつて来る。ほんの僅かの我慢が、抑えるのに苦しい大きなものにふくらみ易く、それでいて表面を楽しげに取りつくっているのが実に愚かな行為に思えて来る。不快な意識が山の中の、小さな天幕の生活を急激にみじめなものにする。

長い山の生活を終つて、麓への道を、互いに口数も少なくなつて下らなければならない

日がやって来る。どういふことか炊事道具だの、登攀のための道具がうまく荷物に納らず、不恰好な荷を背負って、これで夏の山の長かった滞在も、結局は惨めに沈んだ気分で終らなければならなかった。

私はそういう時に、最後の我儘として、もう一度ひとりになって山へ戻ることを仲間に許してもらう。何という自分勝手な真似をする奴だ、そういう視線を背に受けて、下りかけた道を再び山へと戻って行くのは私にしても愉快であるはずはなく、気が狂ったのではないかと自分でそう思うほどだった。

そんな状態で引き返して来た穂高で、私はその岩峰を見つけた。友だちと登ったところへもう一度登ることは、何としてもできなかったし、そうかといって、一カ所にじっとしているわけにも行かず、藪や急な沢をのぼって、小さいながら気分のいい、そしてどんなことがあっても人の来ない明るい岩の上の自分の場所が欲しかった。

そこにいる限り、私のことを気づかって仲間が戻って来ても探しようがなかった。勿論その岩峰で何をする目あてもなく、もうそろそろ秋を知らせるような風の中で、晴れ渡った、青というより黒に近いほどの澄んだ空を見ているだけだった。

ただ、私はこれから先、仲間と一緒に山登りを続けて行くことがむずかしくなるのではあるまいかと思われた。それは誰の責任でもなく、私の内部に不幸にして育ってしまった

排他的な性格のためかも知れなかった。仲間をつくって山へ入るのが、正直に言ってますます重荷になり、自分の我儘を抑えるのに、段々と大きな努力が必要になり、結局は途中で別れてしまうような迷惑をかける度数が多くなって、最初から一人の山歩きをするようになって来た。

私の内部に育ったものを知らせてくれたこの穂高という山をそれから訪れたが、私が見つけた岩峰が見当らない。崩壊してしまえばすまないのに、もう今では見当さえつけにくくなってしまった。それほど小さく目立たない岩峰であった。

甦る山麓

四、五日前までは、林の北側の土手などに、これが雪かと思われるほどによごれ切った雪が斑らに残っていたのに、もう何処をさがし歩いてもそんなものは見当らない。そして最後の雪の塊が、まるで動物の死骸のようにころがっていたその下の草も、一日二日と続いた暖かさで、新しい芽を青々とのばしてしまった。

この雪解がすっかり終った季節には、土の匂いが少々たまらないほどに烈しい。

そして陽炎の立ちのぼっているのを見ると、その匂いの発散のせいで、一面にゆらゆらと空気が揺れ動いているように思えて来る。

山麓にこうした春の安定した、静かな日が訪れると、それまで、まどろみを続けていた生命が、突然のことのように目をさまし、生れ出ることを自らは知らずに、地表の浅いところでおののいていた新しい生命がいたところで爆発をし、それらはすべて無音のうちに営まれるので、匂いばかりが霞のように棚引くのではなからうか。